

今この本を手にとられている方の中には、DV (Domestic Violence) 加害者プログラムに興味がある方もいらつしやるでしょう。

当事者として悩み、薬にもする気持ちで加害者プログラムについて調べている方もいらつしやるかと思うと、心が痛みます。加害者プログラムに通って、本当に暴力を振るわなくなるのか、知りたくても誰に聞いたらよいかわからない。友達に聞けば、「DVが治るわけがない」と言われるし、プログラムの主催者に聞いて「治ります」と言われても、もしかしたら商売で言っているのかもしれないと思ってしまう……。そういつた考えが、堂々巡りしてしまうかもしれません。

私は、加害者プログラムに通った夫と暮らしています。加害者プログラムとは、どんな人に対しても対等平等で尊重しあえる関係を築くことを目的とし、また、DV行動は相手を力で支配するために自分が選択した行為であることに気づき、その責任をとるための行動と価値観の変化を学び、身につけるためのものとされています。

私は、妻としてプログラムを経験してきました。プログラムの利用者の立場から見てきたことや、それにより家庭がどう変化したか、または変化しないことはなんなのか。ひとつの事例でしかありません

が、こうした意見を世に出すことは大事なことだと思って書くことにしました。

従来、DVへの対応としては、逃げるか我慢するかとの2択だと言われていました。それは、「DVは治らない」と信じられていたからです。しかし、DVの存在に気づいたからといって、すぐに今まで築いてきた家庭を解散させて逃げるができる人は限られています。

逃げる先となる環境が整っていること。経済的に逃げるのが可能なこと。子どもの生活のこと。それらがきちんと整うか、または整わなくても生きるためには逃げるしかないぐらい追いつめられるまで我慢した場合に逃げるのが可能になってくるのです。

それほど逃げることのハードルが高いにもかかわらず、逃げない＝耐えることを選んだ、と認識され、身動きがとれずに苦しんでいる人があとを絶ちません。

そんなこの先の選択肢がみいだせずにいる方々に、少しでも有益な情報が提供できれば幸いという気持ちです。ただ、ひとつだけ大事なことがあります。

それは、本当に幸せな家庭を望むのなら、加害者だけが学んで暴力を振るわなくなれば解決するとうわけではない、ということ。関係した人が皆で学ぶことが大事だと、私はプログラムを通じて実感しました。

この本では、私がDVのプログラムを通じて学んだことを中心に、いかにしてDVに早く気がつき対

応するかを書きました。また、プログラムでは、平等で支配のない夫婦の関係を目指した取り組みがなされます。そのためプロセスも書きました。

そして、最後の章では、実際にDVに悩んだ人の経験談が登場します。

「もしかして、DVかもしれない」

そう気がついたときが、幸せへの第1歩です。怖がりながら、ドキドキしながらでもよいので、お付き合いたいだけなら幸いです。